

1. 教育の責任

大手前大学の「生涯にわたる、人生のための学び」という建学の精神に基づき、「自ら学ぶ力」「他者と協働する力」を養う教育の実践を目指している。

「日本文学入門」（教職課程必修科目〈中高国語〉、春学期、2単位、217名）

「日本の名作を読む」（教職課程必修科目〈中高国語〉、秋学期、2単位、386名）

「日本人の心とことば」（春学期、2単位、85名）

「日本文学演習」（春学期、2単位、36名）

「書道文化」（秋学期、2単位、37名）

「ゼミナールⅠ・Ⅱ」（春・秋学期、各2単位、22名）

「博物館実習」（博物館課程必修科目、通年、3単位、14名）

2. 教育の理念

過去の文物を通して、変化する現代社会を生きる人間力を養うことを目標としている。昨今「古典文学は必要か？」という問いをしばしば耳にするが、時代も言葉も異なる文学や歴史資料という過去の文物を、作者の生きた時代や社会状況などの背景も含めて理解しようと努め、学び得たことを言語化し、共有する行為は、まさに、国際社会を生きる上で必要な「他者理解力」と「自己表現力」を養うことに他ならない。対象を正しく理解するための基礎知識を身につけ、多様な価値観が存在することを知り、学び得たことを言語化して他者と共有する一連の学修プロセスのなかで、学生自身が気づきや喜びを得ることができる授業を目指したい。

3. 教育の方法

日本文学系の授業では、主に古典から近現代文学を取り扱う。学生の多くは、中高での単語・文法の暗記教育による苦手意識を持っている。現代作家による現代語訳や、漫画・アニメ化された作品等も活用し、まずは内容の面白さを味わってもらえるよう工夫している。また、中高の教科書で学んだ作品を、改めて深く読解することで、学生自身が大学でのより専門的な学びを実感することを目指している。作品読解において、鍵となる部分は古文そのものの表現の分析を行い、古典文学にアプローチするための基礎的な方法を提示する。合わせて、古典と現代作品両方の優れた表現に触れることで、自らの意思・思考を正確に言語化する力を養うことも目指している。授業内には、古典を通して自己のあり方を内省する契機となる問いかけを積極的に行い、過去を通して現代を学ぶことを学生自身が実感できるよう心がけている。毎回、数人の学生のコメントを「フィードバック」として紹介し、様々な考えがあることを知り、自己認識を深める機会としている。また、授業によってはくずし字の学修も積極的に行っている。わずか15回の授業であるが、毎回の地道な継続学修により、飛躍的に読解力を伸ばしており、学生の学修意欲の向上につながっている。

博物館実習の授業は、実技実習・見学実習・館園実習の三つが主となる。デジタル技術の進歩により、博物館をめぐる状況も目まぐるしく変化している。時々刻々の変化にも対応できるよう、オンライン展示等新しいトピックも取り上げ、実践的な学修を心がけている。掛軸・巻子・屏風・陶磁器等、実物資料を用いた実技実習では、個別指導を行い、受講者全員が確実に技能を習得できるよう努めている。また、学芸員の仕事は、展覧会開催に伴う事務や広報物のデザイン、関連講座でのレクチャー等、多岐にわたる。授業では学芸員としての礼儀・コミュニケーション力の養成を図るため、企画プレゼンテーションを始めとする各種発表・討議や、学生主体による企画展の開催を行い、社会人として通用する力を身につけることができるよう、指導を心がけている。

4. 教育の成果

講義系科目では、授業をきっかけとして学生の興味・関心の幅が広がり、授業で紹介した本を自主的に読んだり、自身でも調べたりしたとの報告を受けている。授業外にも学修の成果が上がっていることを実感する。

演習系科目は、とりわけ学生自身が達成感を感じる度合いが高い。指導する側から見ても、各分野の実践的な方法・技術を習得し、

学生が成長していることを感じる。博物館実習では14名全員が学芸員資格を取得することができた。

5. 改善への努力と今後の目標

オンデマンド教科「日本文学入門」「日本の名作を読む」のうち、「日本の名作を読む」には今年度より字幕をつけていただくことができた。留学生からの質問が激減し、また、日本人学生にとっても、「周囲が騒がしい時に字幕で勉強できるのはありがたい」との感想が寄せられている。学習効果向上に有効であることを実感した。

「日本文学演習」では、今年度は百人一首を扱った。オンデマンド教科において百人一首を取り上げた際、「学校で暗記させられたが、歌の意味までは知らなかった。内容を読むと非常に深く面白い」という声が多かったため、学生に馴染みのある古典作品として、取り上げた。

授業方法には、歌合形式を取り入れた。①4～5人のグループを作り、グループごとにテーマを考え、テーマに沿った和歌を2首選ぶ ②2人ずつの左・右グループに分かれ、それぞれ1首について言葉の意味用法、出典、和歌技巧について調べ、鑑賞ポイントと現代語訳を作成する ③発表資料にまとめ、発表 ④左右の発表を踏まえ、選評（発表者・聴講者とも） ⑤授業内容を文章化する

という一連の作業を通して、文学作品の基礎的な調査・研究方法、発表資料の作成、プレゼンテーション技法、文章表現力を修得することを目指した。テーマを設定することは、視点によって作品の読みが変わることを実感する機会にもなったようである。また、左右の和歌を比べることで、分析力・批評力を養うことも可能になった。受講者数多数のため、15回で全員が発表できるよう、考え出した方法であったが、卒業研究を控えた3年生（また4年生も）が、各自の研究テーマに取り組むための実践力を養成する構成になったと考える。次年度の授業方法に役立てていきたい。

「博物館実習」では、最終講にこれまでの学修の総まとめとして学生主体の企画展を開催している。学生は、展覧会の企画、出品資料の調整、ポスターチラシ・展示図面・キャプションの作成、展示、展示解説、会場案内、撤収、展覧会記録の作成という展示に関わる一連の作業を経験することになる。学生は、限られた時間・空間で、スムーズに展覧会を開催するためにはどのようにすればよいか、メンバーと協力し、役割分担、スケジュールの調整を自主的に行っており、毎年ユニークな展覧会を開催している。展覧会記録としての冊子には、出品資料解説のほか、4年間の博物館過程での学修の振り返りと、後輩へのメッセージを書くように指導している。いにしへの資料を現在から未来へ繋ぐことが、学芸員の使命である。今現在の自身の学びが、未来につながることを意識する機会となっている。次年度も継続してカリキュラムに組み入れたい。

【添付資料】

2023年度大手前大学博物館実習企画展「押し押し展覧会」冊子（博物館実習成果物）